

10月5日はインドから中国へ坐禅ざぜんを伝えられた達磨大師だるまだいしのご命日です。

達磨さまと言うと「七転び八起きななころや お」をイメージする人が多いのではないのでしょうか？

達磨さまはなぜあのようなお姿で日本人に親しまれているのでしょうか。一説には達磨さまが中国の嵩山すうざんという山の洞窟の中で、壁に向かって九年間、一心いっしんに坐禅を組んでいたらあのようなお姿になったと言われています。達磨さまの厳しい修行の様子をうかがうことができるエピソードです。

達磨さまはお師匠さまの教えに従い、坐禅の教えを広めるために中国に渡ります。

最初に梁りょうという国の武帝ぶていという王様が達磨さまに質問をしました。

「私はこれまでたくさんの寺院こんりゅうを建立して、深く仏教を信仰してきました。

仏教の知識では他に劣おとらないと自負じふしていますが、このような私に仏教はどんなくどくくどく功德をもたらしてくれるのでしょうか？」

達磨さまは「何も無い」と答えて、その場を立ち去ったと言われています。

達磨さまは武帝に何が言いたかったのでしょうか。

仏教の教えで大切なことの一つに「貪むさぼりの心を起こさない」という教えがあります。武帝は仏教を信仰しながらも、それを自慢し見返りを求めたため、貪りの心を起こしていたのです。

当然、達磨さまは「何も無い」と答えたのでした。

達磨さまは、この時梁という国で坐禅の教えを広めることを断念されました。

その後、達磨さまは一人、嵩山すうざんで壁に向かってひたすら坐禅をしておられました。そのお姿ひに惹かれて、四人の弟子が集まってきました。弟子達は達磨さまに教えを請いましたが、達磨さまは黙々もくもくと坐禅を組み、教えを説くようなことは無かったと言われています。それでも坐禅の無言の力が、弟子たちを達磨さまの元にとどめさせ、共に厳しい修行を続けたのでした。達磨さまの坐禅の教えは、言葉で伝えるものではなく、実践じっせんの中に伝わるものだったのです。こうして達磨さまが伝えた坐禅の教えは、中国に根付くことになりました。

現代の日本における達磨さまは、おもちゃや縁起物のお姿をされておりますが、歴史上の達磨さま同様、七転び八起きでどんなに転ころがされてもその場で必ず立ち上がる

お姿です。「起き上がり<sup>こぼし</sup>小坊師」とも呼ばれている縁起物のようです。

このような「いま現在、ここで」何度でも立ち上がることのできる姿を私たちも見習いたいものです。

皆さんも達磨さまが伝えられた坐禅を体験してみませんか？